

随伴症状

1. 感覚異常

聴覚過敏

不意の音への過敏な反応



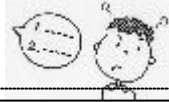
フィルターがかからない
喧騒の社会で暮らす



指示は一つずつ

知的レベルは高いのに、同時に2つのことを指示すると、できないこともあります。先に言われた方が、後の方かのどちらかが分からなくなってしまいます。

こんなところも理解して、一つずつ指示を出すことを心がけないといけません。



大事な音の意味づけができない

触覚過敏



毎日同じ服を着ている

味覚過敏



単なる好き嫌いではない

視覚過敏

直感視覚が優れている

嗅覚過敏

臭いが気になり、接近しすぎる

随伴症状として次のようなものがあります。

不意に出てくる音にはビクッとすることが多いようです。犬の吠え声、電話のベルや咳、花火の音、怒鳴り声、教室のざわめきなんかも、ものすごく嫌ということがあります。

養護学校の運動会の「よーいドン」が先生の口であったり、笛の合図であったりするのは、不意の音への過敏な反応に対する配慮の一つです。

健常な人は、遠くのこそこそ話の声や咳払いする音は、フィルターにかかって無視するようになっていますが、アスペルガー症候群や自閉症の子どもたちは、こうして話している私の声も咳払いの声も、向こうの方でちょこっと出ている声も、みんな同じような重要さで入ってしまうのです。

一生懸命、先生の話の聞こえようとするんだけど、周りでもこそこそと話されると、もう何を言ったかさっぱりわからない。そういった^{けんそう}喧騒の社会の中で彼らは暮らしているんだ、一生懸命、生活しているんだということを理解してあげなくちゃいけないのです。大事な音の意味づけができない。そういう感覚の問題があります。

触られるのが嫌な子どもも多いですね。肩に触れられると嫌だなあと思っても、我慢してじっとしていることも多いです。

また、何日も同じ服を着ていることがあります。それはこだわりというよりは触覚の過敏さから、異なる服の触覚刺激を避けるために同じ服を着ているということもあります。痛みに関しても、ものすごく過敏だったり鈍感だったりします。ちょっとした歯の痛みをものすごく訴えるのに、注射のときは黙ってとか、また逆のこともあったりします。アンバランスなところがあるんです。

味覚も、すごく過敏な面をもっているようです。にんじんをどんなに細かくして入れても、きれいに出している。それだけ過敏に反応しているんです。こうなると単に好き嫌い、偏食というのではなく、味覚過敏ということになります。

見た物にすぐ反応してしまいます。掲示板でも書いてある物を最後まで読まないと気がすまないように、じーっと見入っていることがあります。時刻表とかの数字が好きだったり車のナンバーを見ないと気がすまなかったり…。また、それを覚えてしまったりするのです。直感視覚が優れているという感覚の問題でもあります。

臭いにとっても過敏でクンクンと嗅ぎ回ってしまうこともあります。とても臭いが気になるのです。そのとき、必要以上に接近しすぎて、誤解されてしまうこともあります。

2. 運動の不器用さ



動作の模倣が苦手

教室移動が苦手

運動が不器用で運動能力の劣っている子どもが多いです。走り方もぎこちなく、ボール遊びが苦手。手先が不器用で、箸の使い方が下手、字が上手に書けない、工作が苦手ということもあります。中には非常に工作が得意だという子どももいますが、一般的には苦手なことが多いです。

また、他人の動作を模倣するのは苦手なので、リズム体操や、お遊戯とかを覚えるのが苦手ということがあります。

決してさぼって、やる気がなくてというのではなくて、苦手だと理解してやって欲しい。だから、運動会の演技を覚えたり、次の教室に移動したりすることが苦手なのです。移動することができなくて固まってしまうのは、カタトニアと言われる症状で、決してわざとやっているわけではありません。

3. 多動・チック

4. LD

5. その他

てんかん、睡眠障害、不安障害
うつ状態、被害関係妄想

幼稚園の頃は非常に多動でADHDと間違われやすいこともあります。チックのある子もいます。知的には遅れていないのに学習できないこともあります。LDを合併していると考えた方がよいこともあります。

診断基準では、アスペルガー症候群とLDは合併するが、アスペルガー症候群とADHDは合併しないことになっています。ADHDのような症状があったとしても、それはアスペルガー症候群を優先します。



増えている？

自閉性障害
LD(学習障害)
ADHD(注意欠陥多動性障害)

自閉的な発達障害をもつお子さんが昔に比べたらはるかに多いわけですが、**増えているのか**というそれはよく分かりません。そういう見方をしたために、昔は取りこぼされていたものが、今あがってきたから多くなってきたということも考えられます。しかし、ADHDやLDもやっぱり昔に比べて多くなったという印象はあります。

一つには**環境ホルモン**のことが言われています。大人なら何の影響もない微量なものが、母体内で胎盤を通して胎児に行ってしまった。そのことが、何らかの障害をもたらすということはあると思います。

我慢ができない、衝動性の強い子どもたちが多くなっているように思うんですけども、一つの要因として考えられているのが、**赤ちゃん時代のテレビ、ビデオ**です。赤ちゃんのときに、テレビ、ビデオを6~8時間、一日の1/4や1/3を見せていたという、対人交流が乏しくなったり、衝動性が強くなったりするのではないかと考えられています。

赤ちゃんが発達していく上で1番大切なことは相互交渉です。抱っこして赤ちゃんが喃語なんごのようなものを言うと、こっちも思わず何か言いたくなりますよね。赤ちゃんがニコッと笑うとこちらもニコッと笑う。反応が返るわけですよね。あるいは赤ちゃんのまねをこちらがする、赤ちゃんもこちらのまねをする。そんな**相互交渉**が対人関係や情緒の安定や感情の発達には非常に大事なんです。ところがテレビやビデオは一方的な伝達ですよね。テレビとビデオにニコッと笑ったり、喃語で何か言っても向こうは何も反応しないですよね。それで「あつ何も反応しない」と思って反応しなくなるわけです。



心の理論

心の理論とは、「人の気持ち、相手の考えがくみ取れば心はあるだろう」という仮説の基に始められた研究です。

高機能自閉症で3つ組より、もっと根にあるような障害と考えられているのが「心の理論」の障害です。心の理論とは、他者が何を考えているかを把握する認知能力のことで、次のような課題で確かめることができます。

「サリーとアンの課題」

課題：サリーはカゴを、アンは箱を持っています。サリーはビー玉をカゴに入れて、外へ出て行きました。その間にアンはビー玉をカゴから箱に入れ替えました。

質問：外から帰ってきたサリーは、ビー玉で遊ぶかと思いましたが、さて、サリーはカゴと箱のどちらを探すでしょうか。

正解：ビー玉を入れ替えられたことを知らないサリーの立場に立って考えることができれば、「カゴを探す」が正解。



大体4歳を過ぎると、質問されたとおり、サリーの立場に立って考えることができるので、「サリーのカゴ」と正解できるのですが、アスペルガー症候群の子どもさんは、9歳くらいにならないと通過できないことが多いんです。

「サリーは？」と問われているのに、「自分」は、このストーリー上の本当の結末(ビー玉のありか)を知っているのに、「箱を探す」と答えてしまうんです。

つまり、自分とサリーの立場が混在し、心の理論の発達が遅れていると考えるわけです。



青年期には、同一性(アイデンティティ)を獲得しようとして一生懸命です。

彼らは目に見えるもの、実際にあるものを規範にしようと思うので抽象的なものを理解するのが苦手です。

例えば、野口英世のようになりたいと思ったら、その伝記を読むのです。そこで、「野口英世は小さいとき貧しかった」とあると、「貧しい生活をしなければだめだ」と思ってしまいます。そして、親に「そんな高い物を買うな。もっと貧しい生活をしろ」と言い出したりするわけです。突然聞くと突拍子もないこと、何を言うのかと思うかも知れませんが、彼らなりに必死でアイデンティティを探そうとしている。その一つの出来事なんです。